

折紙

中勘助

青空文庫

私はまたその妹とすごした海岸の夏をわすれたことはない。あの松原のなかで潮風の香をかぎ松をこえてくる海の音をききながら二人して折物をして遊んだとき、円窓のそとにはなぎの若木がならんで砂地のうえに涼しい紺色の影を落した。妹はふつくらと実のいた長い指に折紙をあちらこちらに畳みながらふくふくした顔をかしげて独り言をいったり、たわいもないことをいいかけたりする。つややかな丸まるまげ鬘まげに結ゆつてうす色の珊瑚の玉をさしていた。桃色の鶴や、浅葱あやぎのふくら雀や、出来たのをひとつひとつ見せてはつづけてゆく。私は妹と向きあつてなんのかのとかまいながらやつとので蓮花れんげとだまし舟を折つた。ここにあるひとたばの折紙はなつかしいそのおりの残りである。藍や鸚ひわや朽葉くちばなど重りあつて縞になつた縁をみれば女の子のしめる博多の帯を思いだす。そのめざましい鬱金うこんはあの待宵まつよいの花の色、いつぞや妹と植えたらば夜昼の境にまどろむ黄昏の女神の夢のようほのぼのと咲いた。この紫は螢ほたるぐさ草、螢が好きな草ゆえに私も好きな草である。私はこんなにして色ばかり見るのが楽しい。じつと見つめていれば瞳のなかへ吸いこまれてゆくような気がする。ようやく筆の持てる頃から絵が好きで、使い残りの紅皿を姉にねだつて口のはたを染めながら皿のふちに青く光る紅を溶とかして虻あぶや蜻蛉とんぼの絵をかいた。そのの

ちやつとの思いで小さな絵具箱を買ってもらい一日部屋に閉じこもってくさ草紙の絵やなど写したが、なにも写すものもなく描くものも浮んでこないときは皿のうえにそれこの色をまぜてあらたに生れる色の不思議に眼をみはり、また濃い色を水に落して雲の形、入道の形に沈んでゆくのに眺め入った。さてもこの綺麗な色紙はいつの日かまた妹の指に畳まれて鶴となり、ふくら雀となるであろうか。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆68 紙」作品社

1988（昭和63）年6月25日第1刷発行

底本の親本：「中勘助随筆集」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年6月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

折紙 中勸助

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>